

Tristram Shandy 再考

加藤 正人

1. はじめに

本論はスターンの『トリストラム・シャンディ』論である。本論のキーワードは「小説」「諷刺」「モック」「コミック」などである。本論の前半部分は概ね「諷刺」としての『トリストラム・シャンディ』を論じるものである。後半部分は、『トム・ジョーンズ』と『オトラント城』との関係において『トリストラム・シャンディ』を論じるためのものである。

2. 『トリストラム・シャンディ』とはなにか

スターンの紹介、「メニッポスの諷刺」の文脈における『トリストラム・シャンディ』の価値。

2.1. イギリス史の中の『トリストラム・シャンディ』

『トリストラム・シャンディ (*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*)』(1759–1767) はローレンス・スターン (Laurence Sterne 1713–1768) の作品である。スターンは Anglo-Irish である。つまり、イギリスから来たアイルランドの住人であった。

スターン研究は、我が国では、そんなに頻々とはなないが、それなりになされて来た。昭和九年の岡倉由三郎の『研究社英米文学評伝叢書 22——STERNE』はスターンの生涯と死を、簡単に紹介したものである。不勉強で、それ以前に評伝があるか知らないが、この著作にも日本語の参考文献が載せられてはいない。同著者の三年前の著作に『ロレンス・スターン——その生、その死』というのがあるらしいが、こちらは、「英文学叢書序文」ということで、それなりの大きさの本としては、今読めるのは前者のほうが研究の当初として注目に値する。

次に昭和三十年に京都大学教授村上至考が、これも研究社の叢書、今度は「研究社英米文学語学選書」として、出した『笑いの文学——スターンとスモレット』がある。この本もまた、スターンの伝記を記述するが、特異な点は、副題にもあるようにスターンとスモレットを対比的に研究したことである。この本の著者は「はしがき」で評伝や研究を一わたり通読するだけで「なかなかの大仕事」としている。当然そうであり、まして、今の研究者は、もっと大変だと思われる。それでという訳ではないものの、本論に至らぬ部分があっても、情状酌量願いたいものだ。

次に重要な研究書は松尾力雄の『ローレンス・スターン研究』だ。これは1990年の本である。この本はキリスト教の伝統から見た見解が特徴といえるかもしれない。なぜなら、「序」はアダムとイヴの話で始まるからである。ここで「解放」というキーワードが登場して、ミルトンが問題としたような「楽園喪失」と「楽園回復」のテーマが言及される。

次に重要な本は能美龍雄の『ロレンス・スターンの文学——スターンとその人物たち』である。これは1994年の本であり、「スターン文学への入門書」と帯にある。この本はスターンの「死生観」を問題にしている。『センチメンタル・ジャーニー (A Sentimental Journey Through France and Italy, by Mr. Yorick)』への言及もある。

次に重要なのが伊藤誓の『スターン文学のコンテキスト』である。これは1995年のものである。この本は若干雑で、「ジオルジュ・ブーレ」の名から始まり、デカルトやハンス・マイヤーホフが言及され、ロックとヒュームへと移り、「メニッポスの諷刺 (menippean satire)」へと移って行く本である。このメニッポスという名は「諷刺」の文脈でよく見る名である。古代ギリシアのメニッポスはロシアのミハイル・バフチンが『ドストエフスキーの詩学』で研究したことが著名である。バフチンはこの本の第四章で著名な「カーニバル文学」という概念を提唱しているが、同章で、メニッポスの諷刺には十四の特徴があるとした。これもよく諷刺の文脈で言及される。以下はかいつまんだその特徴である。一、笑い。二、発想の自由。三、真理を審理に掛けること。四、俗悪な自然主義。五、最終的な問いかけ。六、世界の多層的理解。七、実験的幻想文学。八、道徳的・心理的実験。九、スキャンダル、エクセントリック。十、強烈なコントラスト。十一、ユートピア。十二、スタイルの混交。十三、挿入ジャンルの存在による多文体性、多調性。十四、評論的性格。こうした特徴は、よく『トリストラム・シャンディ』にあてはまる。話をもどせば、伊藤誓の研究は、著者の「あとがき」によれば、ロック、ヒューム、ディドロなどの同時代思想を「横軸」とし、メニッポスの諷刺を「縦軸」とするものであるという。こうした研究を、著者自身は「備忘録」とし、盛んとはいえない日本のスターン研究の今後の発展の「捨て石」となってくれさえすればよい、と最後に書いている。この「再考」の著者も、同じように感じている。

次に重要なのが坂本武の『ローレンス・スターン論集——創作原理としての感情』である。これは平成十二年の本である。これはもっとも重要な本の一つである。特に書誌が充実しているので、どれか一冊なら、これを持つといいと思われる。内容としては、包括的で、『権争物語』論、『ヨリック氏説教集』、『トリストラム・シャンディ論』、『センチメン

タル・ジャーニー』論と来て、最後に、『イライザに寄せる日記』論を載せている。この一冊で、スターンの全体像をつかむことは可能かもしれない。

日本語の文献で最後に挙げるべきなのが、泉谷治の『愚者と遊び——スターンの文学世界』である。これは2003年の本である。著者自身がいっている通りに緩やかな本で、ロックの『人間知性論』から見た『トリストラム・シャンディ』を論じ、最後に『センチメンタル・ジャーニー』論を載せている。内容は「あとがき」の著者によれば、「愚者論を根拠にした構成論、時間論、身体論などを中心としている」ということである。

スターンの重要性は、彼が、十八世紀イギリスの小説の隆盛の最後を飾ったからである。少なくとも、本論はそのような立場にある。イギリス史を見ると、「ホイッグの優越 (Whig Supremacy)」というのがある。1714–1760年である。1714年はジョージ一世の即位の年である。1760年はジョージ三世の即位の年である。この期間に、十八世紀における重要な初期小説はすべて入っている。すなわち、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)から『トリストラム・シャンディ』(1759)である。ホイッグは個人を尊んだ。これはイアン・ワット (Ian Watt) の『小説の勃興』の文脈とも合致する。なぜなら、ワットは「個人主義 (individualism)」を小説の勃興の重要な理由にしたからである。ノベルは個人を描く。こうして、ノベルの土壌はホイッグの土壌でもあった。そして、ジョージ三世とともにトーリーにかわり、ふたたび、ロマンスの時代が訪れ、ゴシック・ロマンスやロマン主義があった。少なくとも、本論はその前提である。

『トリストラム・シャンディ』は正確にいうと、1759年から1767年までの出版で、分冊で出された。全部で九巻であるが、未完成である。ここらは、カフカの長編と同じで、あるいは、ウェルギリウスやスペンサーと同じで、その時点での完成かどうか議論が分かれるだろう。

本論は『トリストラム・シャンディ』を「諷刺 (satire)」という文脈で論じるものである。すなわち、「小説」の中の「諷刺」の中の『トリストラム・シャンディ』である。

2.2. 諷刺史の中の『トリストラム・シャンディ』

『トリストラム・シャンディ』を「諷刺」という文脈で論じた作品の代表に、我が国では、伊藤誓の『スターン文学のコンテクスト』(1995)がある。彼はこういっている。

〈メニッポスの諷刺〉(menippean satire or menippea) はまれにウァロ (Varro) 的諷刺と呼ばれるものであり、ギリシャの犬儒派^{キニク}哲学者メニッポス (Menippus) が創始した形式とされている。しかしメニッポス自身の作品はほとんど現存していない。文学上の後継者にはウァロとルキアノス (Lucian, Lukianos) がいるが、ウァロの作品は断片的にしか残っておらず、ペトロニウス (Petronius)、アプレイウス (Apuleius) がその伝統を受け継ぐ者とされている。(伊藤 1995: 73)

メニッポスの諷刺は、価値のないものを称揚したりする。これは悲劇の観念とは対比的であろう。チョーサーの『カンタベリー物語』にも書いていたように、また、そもそもアリストテレスの『詩学』もそういったように、悲劇とは高貴な人間の物語である。王族や貴族に比べたら、十八世紀のノベル、例えばデフォーの『ロビンソン・クルーソー』やリチャードソンの『パメラ』の主人公は、ほとんど、価値のないもの(重要でないもの、石ころめいたもの)に本来等しいかもしれない。ノベルというのは、本来価値のないものへの着目を行うといい。すなわち、その意味において、元々、メニッポスの諷刺とノベルは親近性を保っていたといえる。その中で、『トリストラム・シャンディ』が、あまりにメニッポスのものとして花咲いたとしても、いい過ぎではないのである。

英文学における諷刺の伝統といえば、ポープ、スウィフト、スターン、ジョイスなどと来るだろう。その中のスターンを本論では取り上げている。本論は試論というか、備忘録や叩き台のようなものであるので、こうしたことすべてについては詳述はしない。それは、今後の課題である。本論では、大体のアイデアを概観することとしたい。細部が蔑ろであったとしても、それは意図的ではないのでご了承願いたい。

3. 十八世紀イギリス文学史の中の『トリストラム・シャンディ』

十八世紀文学における『トリストラム・シャンディ』の位置付け。『トリストラム・シャンディ』に前後するフィールディングの『トム・ジョーンズ』とウォルポールの『オトラント城』との関係の図式展開。十八世紀英文学の範囲の、『トリストラム・シャンディ』を中心に据えることによる特定(1667-1767年)。

3.1. 『トリストラム・シャンディ』とその周辺

Gary Pyer は *British Satire and the Politics of Style, 1789-1832* (1997) でこういつていた。

Menippean satires often employ multiple narrative voices, reproduce poems or songs, contain dialogues or symposia, shift among dialects, or vary their media to draw attention to their materiality, as Sterne does in *Tristram Shandy* through devices like black and marbled pages. (Dyer 1997:18)

ここでいう「物質性 (materiality)」というのは、十八世紀英文学における『トリストラム・シャンディ』を読み解く鍵となる。例えば、ウィリアム・クーパー (William Cowper 1731–1800) が『課題 (*The Task*)』(1785) でソファを題材としたことや (I sing the Sofa)、それより遙か以前に、ポープ (Alexander Pope 1688–1744) が『髪が強奪 (*The Rape of the Lock*)』(1712) で切り取られた髪を奪い合うことを mock-heroic 的に描いたことや、あるいは、十八世紀中盤で「墓場派 (graveyard poets)」と呼ばれる者たちが、生より墓場、物質性を帯びている場所を重視したことは偶然ではあるまい。『トリストラム・シャンディ』もまた、十八世紀の文化として、こうしたものの延長線上にあるといえる。実際、アンチヒーローたるトリストラムが死者であったり、あるいは、ほとんど物質に近いものとしてあるといっても過ちではない。それがゆえに、『トリストラム・シャンディ』の第一巻が出版された1759年と最終巻たる第九巻が出版された1767年の間に、初のゴシック小説とされるホラス・ウォルポールの『オトランド城 (*The Castle of Otranto*)』が1764年に出版されたといえるのである。少なくとも、文学史というものを考えたとき、すなわち、作品間にある有機的連関が想定されなければならないとき、『トリストラム・シャンディ』の物質性は突如としてはかり知れない説得力を持ちうるのである。なぜなら、ゴシックとはまさに生より死を、世界の物質性を重んずるものだからである。それだからこそ、『オトランド城』では、絵画や鎧が動き出すことが重要になるのだ。決して、それは陳腐な三文小説として片付けられていいものではなく、文学史における然るべき結果としてあるのである (さらには物質=死体が動くメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』を見よ、それは、あまりにメニッポス的なのだ)。

Gary Dyer の同書に、『ナイトメア僧院 (*Nightmare Abbey*)』(1818) で知られるピーコック (Thomas Love Peacock 1785–1866) からの重要な引用が含まれていた。ここは重要なので、少々長いが全文引用しよう。

The greatest differences between the comic novel and the Menippean satire lie in the nature of their characterization and their resolutions of dramatic conflicts. Moreover, because Menippean characters tend to represent ideas, their conflicts often take the form of debates. In general, Peacock's satires belong to the tradition of Aristophanes, Petronius, Rabelais, Swift, and

Voltaire, in which, as he observed in 1835, characters “are abstractions or embodied classifications, and the implied or embodied opinions the main matter of the work” (in the other kind of “comic fiction,” typified by novels like *Joseph Andrews* and *Tom Jones*, “the characters are individuals, and the events and the action those of actual life – the opinions, however prominent they may be made, being merely incidental” [IX: 258]). (Dyer :101)

ここで重要なことは、「キャラクター (character)」と「意見 (opinion)」という概念が、対立されていることである。すなわち、結論をいえば、なるほど、「コミック」ノベルという文脈でいえば、当然、フィールディングの『トム・ジョーンズ』と『トリストラム・シャンディ』が隣合っているように見えるが（前者は1749年、後者は1759年初出）、内実、「キャラクター」と「意見」という対比においては、正反対なのである。

ここで『トム・ジョーンズ』について少しだけ解説したい。『トム・ジョーンズ』の作者のヘンリー・フィールディングは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』で著名である。この二つの作品は似ており、いわばどたばたというか、遍歴というか、コミック・アドベンチャーのようなことを両者はする。無論、そこには悲しげなこともあるのであり、すべてが笑いですまされる訳ではない。この二つの作品のほうで、ほとんど二倍ぐらいに大きい『トム・ジョーンズ』であるが、たとえばそこには、「作者」というのが登場して意見をいったりもする。これは二十世紀文学でいえば、ジョン・ファウルズの『フランス中尉の女』に受け継がれているといえる。なるほど、『トム・ジョーンズ』というの、「意見」をその内に多く含む作品である。頻繁に作者が章の冒頭で口を出すからである。また、『トリストラム・シャンディ』が「キャラクター」の作品ではないかといえば、そうではけっしてないだろう。主人公のトリストラムのキャラクターとしての魅力は勿論、彼の父 Walter や、彼の叔父 Toby もキャラクターとして魅力的なのである。しかしながら、やはり、程度でいうと、『トム・ジョーンズ』の全体的魅力というのはトム・ジョーンズというキャラクターの魅力であり、『トリストラム・シャンディ』の全体的魅力というのは、その諷刺的「意見」の魅力であるといえる。

つまり、『トム・ジョーンズ』というの、なるほど、作者が顔を出して「意見」のようなものをするが、概ね、キャラクターの造形を主眼としており、たいして、なるほど、『トリストラム・シャンディ』というのキャラクター造形において興味深いものなのであるが（トリストラムの父と叔父の対比など）、概ね、意見の開陳という諷刺を主眼としているのである。少なくとも、ここで「キャラクター」と「意見」という対比を行うことにより、一見して、ほとんど同じものとして「コミック」なるものとして処理されてしま

がちな二大作品が、正反対のものとして、類型論的に際立つということが重要なのである。

本論において、『トリストラム・シャンディ』の起源を、ほとんど底無しに、そもそもあったか分からない時を求めるかのように、求めることは避けよう。ただいえることは、メニッポスの諷刺の系譜を見れば、スターンがそこで生まれた土地である Ireland は、Thomas Amory 1691?-1788 という人がいて、その人はスターンが『トリストラム・シャンディ』を出す三年前、すなわち 1756 年に *Life of John Buncl*e という著作を書いており、これは、*The Life and Opinions of John Buncl*e という名で知られているのだ。これについて深入りすることはここでは避けたい。むしろ、ここでは、上記の『トム・ジョーンズ』と『トリストラム・シャンディ』に『オトランド城』を加え、それらの三大作品の、十八世紀における意義を構築して見たい。なぜなら、なるほど、すでに見られたように、例えば『トム・ジョーンズ』と『トリストラム・シャンディ』はほとんど相互にたいしてアンチ・テーゼでありうるのであるが、それでも、十八世紀という、尽きせぬ泉における、諸小説をまとめあげる一本線を想定することは無駄ではないからである。一つの大きな歴史、すべてを一つのヴィジョンで総括することが不可能になってからもう久しいかもしれない。しかしながら、それにもかかわらず、否、それゆえにこそ、ここでふたたび、十八世紀中期から後期を代表する小説の三作品を一つの作品として見ようと思う。

3.2. 『トム・ジョーンズ』、『トリストラム・シャンディ』、『オトランド城』

まず図 1 であるが、『トム・ジョーンズ』が出版されてから、『トリストラム・シャンディ』の出版を経て、『オトランド城』が出版されるまでの中で、三作品を「人間 (human)」「亜人間 (humanoid)」「非人間 (non-human)」の三つに分類する。すなわち、以下である。

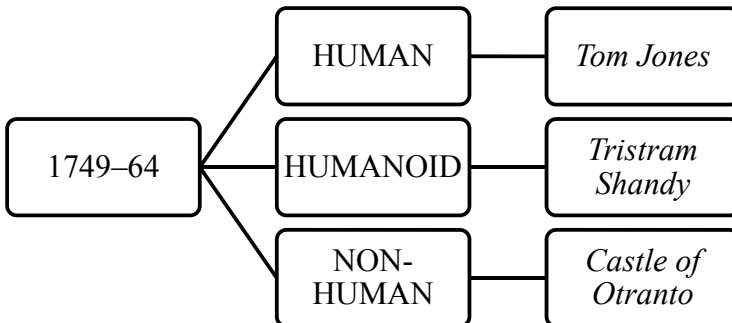


図 1

これについて若干説明すると、トム・ジョーンズというのは勿論「人間」であるが、トリストラム・シャンディが通例の意味で「人間」かは疑わしい。彼はホムンクルスと名指されている。この *homunculus* というのは恐らくラテン語由来であり、「小さな人間」という意味である (*homo* は『人間』という意味)。この *culus* という語尾が小ささをあらわすのである。たとえば、*minuscule* (小文字、取るに足りない) などというのと同じである。しかし、彼は鼻が欠けている。ヒューマノイドのイドというのは、これも恐らくラテン語で、*humano-id* と書き、「似ている」という意味の接尾辞である。つまり「人間に似ている」などという意味である。つまり、「人間」から「人間に似ている」ものに移り、それが「人間でないもの」に移るのがこの図 1 のあらわすところである。なぜなら、『オトランド城』と書くとき、主人公はいわば「城」だからであり、城は「非人間」だからである。たとえば、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』というとき、主人公はジョナサン・ハーカーではなく、ドラキュラでありうるのと同じである。ことによると、作者たるアイルランド人は、イギリスをあらわすハーカーではなく、実際、アイルランドをあらわすドラキュラをこそ物語の主人公として見据えていたのかもしれないのである。同様に、『オトランド城』における主人公は、多くの人が思い出せない名前の側よりは、「城」そのものかもしれない。

次に図 2 である。これはポープがそれを得意とした「モック (*mock*)」という用語に着目する。モックというのは「茶化す」や「模倣する」の意味がある。それで、モックを「コミック (*comic*)」と「フェイク (*fake*)」の二つに分岐させることとする。ここでは、コミックが『トム・ジョーンズ』であり、フェイクが『オトランド城』である。なぜなら、『オトランド城』は、作者たるホラス・ウォルポールが、偽中世的な物語として書いたものだからである。彼は、本の出版当初、さも、その本が、実際にある文書を翻訳したものであるように見せていたのである。この行為は「フェイク」すなわち「偽る」ということである。それで、ゴシック・ロマンスをフェイク・ロマンスとしてここでは見ている。そして、その「コミック」と「フェイク」の間にあるのが『トリストラム・シャンディ』とする。なぜなら、この作品は全体の基調がコミカルであるが、主人公が人間のフェイクのようなものであり、また、人をはぐらかしたり、騙くらかしたりする本が『トリストラム・シャンディ』でもあるからである。

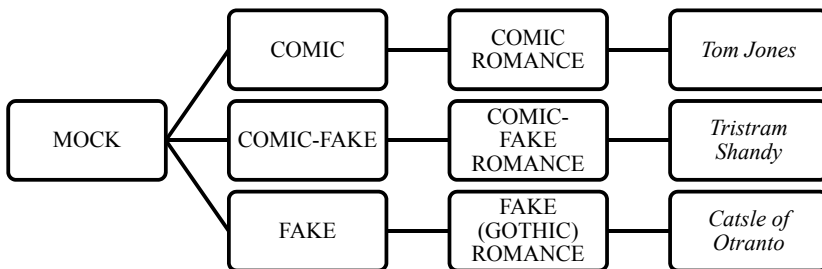


図 2

次に図3である。ここでは **comic** と **fake** をさらに、試しに、それぞれ三つの概念に分類する。それで、分類された概念を組み合わせることにより、三作品『トム・ジョーンズ』、『トリストラム・シャンディ』、『オトラント城』の諸特徴を特定して見よう。まず、コミックという概念を、**comic**, **hot**, **mental** の三要素に分類し、フェイクという概念を **horror**, **cool**, **physical** の三要素に分類する。コミックが熱いか冷たいかは人によるかもしれないが、ここにおけるコミックは「どたばた」のような意味を含むので熱いものとした。また、この **mental** という概念であるが、この概念はフェイクの側の **physical** との対比としてある。一見して、コミックがメンタルであるのは不可解かもしれないが、フェイク・ロマンスとしてのゴシック・ロマンスには「物質」への着目があると考え、物質の逆が精神的なものであるから、コミックに **mental** を分類した。同様にして、**comic** の逆は **horror**, **hot** の逆は **cool** と考えた。なぜなら、笑う逆はぞっとすることだろうし、熱いことの逆は冷たいことだからである。

図3を見よ。『トム・ジョーンズ』にはどたばたの殴り合いがある。これを **bustle** とする。この作品には旅の道中があり、それをコミックでメンタルなものとした。なぜなら、主人公は旅により精神的に成長すると考えられるからである。そして、その道中がコミカルなのがこの作品のよさである。訓戒という言葉の英語が **admonition** であると考えられる。この単語は実際作品中に出て来るので選択した。別の単語でもよい。大体でいうと「説教」のような意味である。この作品には宗教家による説教のようなもの、あるいは、道徳的な訓戒がよくあらわれるので、それを **hot** で **mental** なものとした。

COMIC ELEMENTS		FAKE (GOTHIC) ELEMENTS	
1.comic		4.horror	
2.hot		5.cool	
3.mental		6.physical	
COMIC (<i>Tom Jones</i>)	COMIC-FAKE (<i>Tristram Shandy</i>)	FAKE (<i>Castle of Otranto</i>)	
1.comic-2.hot (bustle)	1.comic-4.horror-5.cool (blank page)	4.horror-5.cool (strange sound)	
1.comic-3.mental (journey)	1.comic-4.horror-6.physical (black page)	4.horror-6.physical (giant hand)	
2.hot-3.mental (admonition)	1.comic-5.cool-6.physical (stone page)	5.cool-6.physical (flying helmet)	

図 3

『トリストラム・シャンディ』には三つの不可解な頁がある。真っ白の頁 (blank page)、真っ黒な頁 (black page)、大理石のような marble page あるいはここでいう石の頁 (stone page) である。これらを、コミックとフェイクという概念の中間として考えると、上記のようになる。全部コミックであり、真っ白と真っ黒をホラーとした。いわば、のっぺらぼうと真っ暗闇がホラーだからである。石の頁はひんやりと cool で物質的である。

『オトラント城』には三つの奇妙な現象が起こる。他にもあるが、特にそれらを挙げる。奇妙な音がするのと、巨大な手が出現するのと、冒頭でヘルメットが空中を飛ぶことである。これらを、全部一応ホラーとして考え、ヘルメットだけは cool とした。なぜなら、このヘルメットがクララ・リーヴ (Clara Reeve) という女流作家に笑われたのは史実であり、ホラーは笑いと逆だからである。音が coolなのは、音は物質的ではないからである。手とヘルメットは当然物質なので、physical とする。

以上のように、十八世紀最後の三作品を分類した後に、では、十八世紀とはいっから始まっていたのかを考えたい。なぜそれらが十八世紀最後の作品であるかといえば、「ノベル」の時代が一旦終わると、ゴシック・ロマンスから「ロマンス」の時代が始まってしまうからである。ノベルは現代志向で、ロマンスは過去志向である。十八世紀とロマン主義は別

であるとここでは考えられている。それで、ロマン主義の発端であるゴシック・ロマンスが十八世紀を終わらせたとする。

次に図4であるが、この図は、本論の中心的関心である『トリストラム・シャンディ』をある重要な十七世紀における作品と対比させるものである。その作品とはミルトンの『失樂園』である。この『失樂園』は我が国では松尾力雄が『ローレンス・スターン研究』で問題としていたものだと上で言及した。

以下の図4を見よ。これはほとんど直観的な理解である。いくらでも選択肢はあるだろうし、ここにある概念がすべてではなく、「たとえば」、という意味で、ここでは書いてある。カジモドという男がノートル・ダムにいたが、彼の背中は曲がっている。もし聖なるものがストレートであるなら、まがまがしいものは曲がっているかもしれない。魔女の鼻など。その調子でいって行くと、天国は対称で地獄は非対称である。この非対称という概念は案外重要で、『トリストラム・シャンディ』の最後の巻に出て来るあの意味不明な蛇かミズがのたくったような「この本はこういう流れて書いてあります」という図は、実に非対称な図であった。少なくとも、この『トリストラム・シャンディ』という蛇のような、怪物のようなものが、真っ直ぐであったり、対称的であることを望んだ聖なるものであるとは到底思われぬ。天国が閉じているなら、地獄は開いている。エデンは閉じている。しかし、地獄の王子ルシファーがそれを開けてしまった。天国は一枚岩 (monolith) かもしれない。しかし、地獄はばらばらである。ミルトンの『失樂園』で奇妙に悪魔どもが仲がいいのは、かれらが元々天使であったからだ、と思われる。悪魔はシンボルとして無秩序ではないか。天国が祝福されているなら、当然、地獄は呪われているが、この呪詛というのを悲しみ (trist) という意味で取って見たい。こちら辺で、トリストラム・シャンディが浮かび上がって来るだろう。天国が理想なら、地獄はまがい物 (sham) である。天国に平和があるなら、地獄には騒ぎ (shindy) がありはしないか。それで、エデンたる天国にたいして、trist-sham shindy がありはしないか。これは地口程度かもしれないし、そうでもないとも思われる。この shandy という名がどうして出来たかは作者本人すら知らないかもしれないが、sham と shindy すなわちまがい物と大騒ぎというのは作品自体をよくあらわしているだろう。Shamela、アンチ『パメラ』の作品の著者が、『トム・ジョーンズ』の著者であると考えられている事実を挙げれば、若干は説得力が増すだろう。十八世紀というのは「シャム (sham、まがい物)」の時代でもあったのである。『オトランド城』然り。

BACK TO <i>PARADISE LOST</i>	
HELL	HEAVEN
curve	straight
asymmetry	symmetry
open	close
broken	monolith
trist	blest
sham	ideal
shindy	peace
<i>Tristram Shandy</i>	Eden
<i>Paradise Lost</i>	paradise

図 4

『トリストラム・シャンディ』と『失樂園』を両端であると考え、その間でサンドイッチに出来るのが十八世紀であると予想されうる。そこで、以下のように考える。

THE EIGHTEENTH CENTURY IN 100 YEARS (1667–1767)		
YEAR	ARTHOR	WORK
1667	John Milton 1608–74	<i>Paradise Lost</i>
1719	Daniel Defoe 1660?–1731	‘ <i>Robinson Crusoe</i> ’
1726	Jonathan Swift 1667–1745	‘ <i>Gulliver’s Travels</i> ’
1749	Henry Fielding 1707–54	<i>The History of Tom Jones: A Foundling</i>
1759–1767	Laurence Sterne 1713–1768	‘ <i>Tristram Shandy</i> ’ (volumes i, ii published 1759; volumes iii and iv 1761; volumes v and vi 1762; volumes vii and viii 1765; volume ix 1767)
1764	Horace Walpole 1717–1797	‘ <i>The Castle of Otranto</i> ’

図 5

「十八世紀とはなにか」は重大な問題である。Frank O’Gorman は『長い十八世紀 (*The Long*

Eighteenth Century)』という本を書いたが、この「長い十八世紀」を冠した本はちらほら見かけられる。影響力がある本である。また、「十八世紀イギリス」という名を冠した概説本には「何年から何年まで」というのがよく数字で書いてあるが、どれも決定的ではない。しかし、「世紀」というのはあくまで「百年」であることを考えれば、この1667年から1767年までの百年が十八世紀であるという考えも、決して突飛ではないのである。

こうして、まがりなりにも、『トリストラム・シャンディ』の十八世紀における価値は提示されたのではないだろうか。なぜなら、その作品こそが、十八世紀におけるもっとも重要な作品たちの価値をふたたび知らせるからであり、また、そもそも十八世紀という世紀がどうした世紀であったのかを、考え直させる契機にもなるだろうから。

3. 結論

二十一世紀になってからも、『トリストラム・シャンディ』の論はある。たとえば、Duncan Campbell という人の博士論文を研ぎ澄ましたものとして *The Beautiful Oblique* というのが2002年にある。これは現代の論者らしくデリダに言及もしている。こうした新しい動向をチェックするのがこれからの課題であるといえる。また、論集でいえば、Longman 社に *Laurence Sterne* というものがある。これも2002年のもので、Marcus Walsh 編集である。

スターンの『トリストラム・シャンディ』の研究においては「メニッポスの諷刺(Menippean satire)」という文脈は半ば常識のようになってきている。それは、ロック(John Locke 1632-1704)の『人間悟性論(*An Essay Concerning Human Understanding*)』(1689)が『トリストラム・シャンディ』の理解において必須文献であるのと同様である(『トリストラム・シャンディ』本文にもロックの名が出て来る)。ロックが重要なのは、1984年の論集である *Riddles and Mysteries* で W. G. Day が *Locke May Not Be the Key* という副題を持つ論を書いているにもかかわらず。我が国では伊藤誓が問題にしていた通りである。しかし、やはり、ロックの同作品が本当に『トリストラム・シャンディ』の理解において必須であるか問いたず論文も出ているのであるから、あくまでメニッポスという文脈の中にながらも、本論のようにやることも許されるのではないかと判断された。つまり、ほとんど「超越論的(transcendental、テキストから独立した合理的図式の意味でここでは用いている)」といってもいいほどに図式化するのも無駄ではないだろう。なぜなら、本論の図を見て、ふたたび『トリストラム・シャンディ』をながめ返したとき、その理解がさらに増していないとはいえないからであ

る。『トリストラム・シャンディ』とはメニッポスの諷刺である、の一点張りでは進むべきものも進まないだろう。すなわち、もし諷刺というのが「意見」にその極限を見んとするならば、メニッポスの諷刺のような文脈を当然と見なす「意見」にさらに「意見」するかのようになつくと本論のように図式化することも可能である。まして、『トリストラム・シャンディ』においては、ありえざる黒い頁や大理石の頁が堂々と大きな顔をして世界中でまかり通っているのであるから。

ポープやスウィフトは人間糾弾の手法として諷刺をした。しかし、あえていえば、『トリストラム・シャンディ』にあるのは「人間讃歌」にほかならない。では、ポープやスウィフトは「人間讃歌」を *The Dunciad* や *Gulliver's Travels* においてしたのだろうか。このようにして、早速、「メニッポスの諷刺」は易々と泥沼化する。しかし、ざっくりいえば、メニッポスの諷刺にはポジティブとネガティブがあって、ポジティブ側がスターンで、ネガティブ側がポープとスウィフトと類型化すれば問題ないともいえる。これはもっと詳しい研究が他にあるやもしれぬので、これからも勉強が要る。

我が国で『トリストラム・シャンディ』を紹介したのは夏目漱石と是有名である。夏目の『吾輩は猫である』が『トリストラム・シャンディ』の影響下にあると思っている向きも多いだろう。しかし、この猫の作品は、『トリストラム・シャンディ』のタイトルを模したドイツのホフマンの『牡猫ムルの人生観 (*Lebens-Ansichten des Katers Murr*)』(1819、日本語訳あり)の翻案であることは有名なのだ。『こころ』がゲーテの『若きヴェルテルの悩み』と似ていることを考え合わせると、漱石先生、ことによると、英語ではなくドイツ語から取ればバレないと思ったのかもしれない。しかし、それは別の話だ。しかし、この猫が話すという題材は結構『トリストラム・シャンディ』の理解においても重要で、本来、口を利かない者が口を利くのが諷刺であり、諷刺の祖の一人である古代ローマのホラティウスの父が奴隷から自由市民になったことを考えれば、『トリストラム・シャンディ』の主人公のトリストラムも、そのたぐいと考えると差し支えないだろう。

かつてジョイス (James Joyce 1882-1941) が『ユリシーズ (*Ulysses*)』(1922) の解説に入用である労力を自負したとき、『トリストラム・シャンディ』における同様のセリフを模したのではないだろうか。また、哲学のほうを見れば、ジョン・ロックのみならず、イマヌエル・カントが『純粹理性批判』を書く前から『トリストラム・シャンディ』には *a priori* だの *a posteriori* という用語が出ていたのだった。『トリストラム・シャンディ』は覗けば底の見えぬ井戸であり、それこそ人間心理の、フロイドのいうような「イド (id, 潜在意

識)」かもしれない。著者の不勉強がゆえに、ここでもまた『トリストラム・シャンディ』を論じることが出来ない。しかしながら、「メニッポスの諷刺」への若干の言及やら、Laurence Sterne の先行研究への若干の言及やらで、この論も無駄ではなかったと信じたい。

参考文献

- Amory, Thomas. *The Life of John Buncl, Esq.: Containing Various Observations and Reflections, Made in Several Parts of the World, and Many Extraordinary Relations* (London: Printed for J. Johnson, 1766).
- Dyer, Gary. *British Satire and the Politics of Style, 1789–1832* (New York: Cambridge University Press, 1997).
- Campbell, Duncan. *The Beautiful Oblique: Conceptions of Temporality in Tristram Shandy* (Oxford; New York: Peter Lang, 2002).
- Myer, Valerie Grosvenor (ed.). *Laurence Sterne: Riddles and Mysteries* (London: Vision and Barnes & Noble, 1984).
- O’Gorman, Frank. *The Long Eighteenth Century: British Political and Social History, 1688-1832* (London: Arnold, 1997).
- 泉谷治『愚者と遊び——スターンの文学世界』(法政大学出版社、2003)。
- 伊藤誓『スターン文学のコンテクスト』(法政大学出版社、1995)。
- 岡倉由三郎『研究社英米文学評伝叢書 22——STERNE』(研究社出版、1934)。
- 坂本武『ローレンス・スターン論集——創作原理としての感情』(関西大学出版部、2000)。
- 能美龍雄『ローレンス・スターンの文学——スターンとその人物たち』(松柏社、1994)。
- 松尾力雄『ローレンス・スターン研究』(晃洋書房、1990)。
- 村上至孝『笑いの文学——スターンとスモレット』(研究社、1955)。
- ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男／鈴木淳一訳(筑摩書房、1995)。